

1 特集テーマの背景

「IE レビュー」誌では、年 5 回発行される各号に「特集テーマ」を掲げ、そのテーマにそった論壇、ケース・スタディ、プリズムの記事を掲載しています。特集テーマ以外の記事として、巻頭言、連載講座、会社探訪、現場改善、ビットバレーサロンなども掲載し、毎号できるだけ立体的に IE の活用事例、課題、展望を提供するよう工夫しています。特集テーマの意図や背景は、企画担当の編集委員による「特集のねらい」として各号の先頭に示されていますので、本稿では、年間 5 冊の特集テーマ選定の背景について、合同編集委員会での議論を要約して説明したいと思います。

特集テーマを検討する際に編集委員長として重視していることは、大別すると 3 つの項目です。

1 つ目は、IE の適用可能性を探り、対象の広がりを示すことです。もともと IE は、生産工程の QCD を維持・向上させることを目的として発展してきました。近年では、IE の考え方や手法を前後の工程（生産技術、物流、サプライチェーンなど）に適用する事例、サービス業や農業といった別の産業分野で使用する例、さらにはグローバル展開にともなって、国際的な経営効率向上や人材育成に応用する例なども見られ、その適用範囲は大きく広がっています。また、IT の進歩に応じて、IE の手法自体にも変化が生じています。こうした活用事例の単なる紹介ではなく、背後にある工夫点まで踏み込む専門誌として、「IE レビュー」誌は唯一の存在です。経営から我々の日常生活まで、どんな考え方や手法が活用されているのか、参考になる事例を数多く掲載したいと考えています。

2 つ目は、改めて「IE の原点」を考える、ということです。IE 的な見方や考え方が大切と言われ、その適用対象が広がる一方で、企業活動はグローバル化・スピード化し、IE の専門スタッフを育成しながら、堅実な改善活動に取り組む企業が増えているとは言い難いと感じています。長期的な人材育成や企業体質強化が重要と分かっ

ていても、地道な活動を進めるだけでは競争に勝てないのではないかという意識が強くなると、短期的な効果の見込める生産拠点の海外シフトや人件費の変動費化などが優先されます。その結果、IE が重視する標準作業という考え方は希薄になっていきます。「IE レビュー」誌が IE の専門誌として存続していくためには、例え時代の流れに逆らうように思えても、常に IE の原点とは何かを問い続ける姿勢が不可欠です。

3 つ目は、「現場の感覚」を伝えることです。もちろん、IE は、標準化や改善を通じて経営に貢献する技術ですが、現場での工夫や苦勞に触れずに IE 活動を考察しても、本質に迫ることができません。流行に惑わされず、現場での地道な活動を大切にしたい、そう考えています。

2 各号の特集内容

(1) モノづくり組織の役割 (295 号)

近年、モノづくりセンター、モノづくり技術部など、モノづくりを冠する組織が様々な企業に誕生しています。また、「モノづくり」は一般用語としても広く用いられています。さらには、「ものづくり」「物造り」など、記述方法へのこだわりや違いも見られます。一般に、モノづくりとは、生産や製造よりも広く、サプライチェーンや人材育成などの間接機能も含めて用いられていると考えられますが、各企業では「モノづくり」と称する部門や機能にどんな役割を期待しているのでしょうか。「モノづくりを強化する」とは何を意味しているのでしょうか。「モノづくり」という部門を設けた趣旨やねらい、その中で各社が IE 活動に期待する役割を尋ね、そうしたねらいや期待が実現された事例などを通じて、モノづくりという言葉に込められている内容を改めて考えます。当然に、グローバル化の中での日本のモノづくり、という視点も含まれることになります。依頼原稿だけでなく、座談会や取材も含めて深掘りしたいと考えています。

(2) ここにも「現場改善」(296 号)

現場改善は IE の基本の 1 つであるので、原則として

毎年1回は特集号で取り上げたいと考えています。過去には、ライン作業者が考える改善、女性視点での改善など、対象を絞った特集も企画しましたが、今回は、できるだけ中堅・中小企業での改善事例を多く取り上げ、そこから、日本の製造業のベースとなる強みの原点を探っていきます。生産部門に限らず、間接部門での細かい工夫にも注目したいと考えています。

(3) IoT・インダストリー4.0 (297号)

ITの領域を中心に、インダストリー4.0は大きな注目を集めています。「IEレビュー」誌は、安易に流行を追うことはしませんが、時代の流れの本質を考えるというスタンスで、このテーマを選びました。

インダストリー4.0の基本は「工場をつなぐ」ネットワークという考え方ですが、本誌では、そうしたコンセプトで各社が取り組んでいる活動内容を中心に、IT化の波の中でIEがどう貢献できるかに着目します。例えば、センサーで対象物を認識しながら移動する設備を用いた物流システム的设计や、ITによって設備の稼働状況を集中モニタリングするシステムの構築など、各社の最新の取り組み事例を紹介するだけでも参考になると考えられます。わが社のIoTの特徴と活用への期待、といった未来志向の記事も取り上げたいと考えています。

(4) 生産技術者・IEスタッフの育成 (298号)

このテーマは、文字通りIEスタッフ育成の方法や体系にフォーカスする企画です。IE活動を展開するためにはIErを育成することが不可欠ですが、これまで、その育成体系を正面から取り上げた特集号はありませんでした。座学での教育、現場での実践、ラインとのコミュニケーション、標準化と改善など、IErとして必要な見方・考え方をどのように教え伝えているか、各社の取り組みや体系を取り上げたいと考えています。教育方法や内容の変化から、IErに求められる役割の変化が見えてくるかもしれません。

(5) 物流・ロジスティクス・SCM (299号)

物流も、様々な角度から特集テーマとして取り上げてきました。特に近年は、調達から納品に至る一貫物流のQCDが重視され、ITシーンを活用した物流サポートが活発に進められています。一方で、顧客ニーズは多様化

し、変種変量化が加速する中で、適切な在庫量のマネジメントは競争優位に直結します。今回の特集では、物流だけでなく、情報の流れや資金の流れも含めたSCMに着目することで、改めてロジスティクスの役割と課題について考えたいと思っています。

(6) 経営者はIEをどう捉えているか? (300号)

この号で、「IEレビュー」誌は通算300号という節目を迎えます。これまでの特集号では、産学の著名な方々からの寄稿を集めたり座談会を掲載することが一般的でしたが、今回は経営者の考え方に焦点を当てたいと考えています。IEが改善や標準化を通じて企業の競争力に貢献することを主張しても、その意義を経営者に認識してもらえなければ机上の空論に過ぎなくなります。ITツールを始めとして、経営を革新すると言われるツールや手法が次々と登場する中で、経営者はIEをどのように位置づけ、どう活用していくつもりなのか、その本音を探りたいと考えています。IEが経営のために本当に役立っているのか、もし十分に機能していない点があるなら、いかにそれを補っていくべきかを考察します。そこからIEの将来展望を描くだけでなく、IE協会の活動のあり方についても新たな視点が見つかるかもしれません。

3 おわりに

「IEレビュー」誌は、最新の事例を単に紹介するだけでなく、背後にある考え方や工夫点をできるだけ盛り込むことで、IEの考え方を普及させ、その適用可能性を拡げていくことをめざしています。読者の皆様とともに充実した誌面を作っていきたいと考えていますので、様々な形でのご支援をよろしくお願いいたします。

(編集委員長/河野 宏和・慶應義塾大学)

発行年月	号	特集テーマ (仮題)	担当協会
2016年 5月	295	モノづくり組織の役割	日本
	8月	ここにも「現場改善」	九州
	10月	IoT・インダストリー4.0	東北
	12月	生産技術者・IEスタッフの育成	中部
2017年 3月	299	物流・ロジスティクス・SCM	関西
	5月	経営者はIEをどう捉えているか?	日本

図表1 これからの特集テーマ